

[体育・保健体育]

思考力・判断力を高める指導の工夫

ーサッカーの授業実践を通してー

吉田 聡*

1 主題設定の理由

保健体育の授業を通し、生徒に身に付けさせたいと願ってきたもの。それは体力の向上と技能の習得であった。運動量を考え、効率のよいドリル練習を組み立てる。生徒がいかに動き続ける中で技能を高めていけるかを考えてきた。しかし、運動に興味をもち主体的に取り組む生徒とそうでない生徒との差が次第に激しくなってきた。今までのやり方では、うまくいかないことを痛感した。

保健体育科の目標については、「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」とある。「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする」ことも大切な目標である。では、どうしたら生徒が主体的に運動に取り組み、このような資質や能力、態度を育てるためにはどうしたらよいのだろうか。

生徒が自ら運動への興味・関心が掻き立てられ、「運動したい」「うまくなりしたい」と願うそのもとは、好奇心や疑問である。「なぜ」「どうして」「どうやったら」それは他教科だけでなく体育においても、意欲のもととなる重要な要素である。好奇心をくすぐるためには、教師側から生徒に自分たちの現状を気づかせ、よりうまくなるためにはどうすればいいのか、どうしたら上手にできるようになるのかを考えさせることが必要である。

そこで、課題を自ら見つけ、その解決を図るためにはどうすべきかという、生徒の「思考力・判断力を高めること」で生徒は運動への興味・関心が掻き立てられ、生徒は運動へ主体的に取り組むのではないか。また、その意欲により、生徒は一層「こうなりたい」「これができるようになりたい」と願い、技能も高めていくのではないだろうかと考えた。

では、思考力・判断力とはいったいどのような力なのか。学習指導要領の中では「自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫すること」、また「これまでに学習した内容を学習場面に適用したり、応用したりすること」となっている。私は簡潔に「自分やチームの現状を知り、課題を見つけ、その課題を自分で解決する方策を考え、実行に移していく力」であると考えた。また、自分の課題を持ち、解決していく力だけでなく「運動の原理・原則について考え、判断していく力を付けていくこと」もその一つであると考えている。思考力・判断力をこのようにとらえ、生徒にその力を身に付けさせることで、生徒の意欲を喚起させていきたい。

当校の生徒はゲームに対しては意欲的に取り組むが、技能を高めるための練習になると意欲的でなくなる傾向にある。より良くゲームを行うための作戦立てや、ある状況を設定しての場面練習などは「面倒くさい」と感じさせてしまうのだろう。

そこで、生徒の思考力・判断力を高めるための手立てとして、生徒自らが課題を見つけ、その解決に向けて様々な練習方法を工夫しやすい環境作りや、ゲーム性を取り入れサッカーの特性に触れさせることで楽しみながらその力を高めていきたいと考えた。本実践で、その指導の有効性について明らかにしたい。

2 研究の目的

本研究の目的は、中学校2年生のサッカーの授業を通し、自チームのゲーム分析やチーム内の話し合い活動から、自らの課題を発見し、その解決策を探し出していく過程が、生徒の思考力・判断力を高めるための重要な手立てであることを検証するものである。

* 柏崎市立第一中学校

3 研究の内容と方法

(1) ゲーム分析による課題の明確化と話し合い活動による思考の共有化（研究内容1）

自分たちのゲームがどのような姿で、どの段階にあるのかを生徒自身が知ることが重要である。こちらから課題を出し、練習をやらせても、技能は身に付くかもしれないが、生徒の思考力・判断力を大きく変容させることはできない。自分たちのゲームを映像や記録により客観的に分析することで、現状に気づき、課題が生まれる。その課題をどのように解決するのか考えることで生徒の思考力は高まっていく。

また、ゲーム記録は生徒に考えてほしいことが表れるようなものでなくてはならない。「コート上のスペースやエリアを考えさせたい」という教師側の意図があれば、ボールの動きとエリアが分かる記録でなくてはならないし、「パスのつながりを考えてほしい」なら、パスのつながり方が分かる記録でなければならない。何度もゲーム記録を取る中で、自分たちのサッカーを常に客観的にとらえようとする思考力が育っていくのではないかと考える。

その後、ゲーム記録から明確化された課題を持ち寄り、チームで個々の思考の共有化を図ることがチームスポーツでは非常に大切であると考えた。すぐにチーム単位で活動させると、リーダーやその種目に長けている生徒任せになり、個々の思考を変容させることはできない。仲間の考えに共感したり、別の視点から意見が持てたりすれば、それこそ思考力の高まりと言える。この過程があるからこそ、その後授業に組み込まれていく「作戦タイム」という時間が有効になるのではないだろうか。分析結果をチーム内で発表することで思考の共有化をはかり、さらなる次へのステップを考えさせたい。

(2) 思考力・判断力を高められるような練習方法の工夫（研究内容2）

ただ「考えて動け」「判断してパスを出せ」と指示しても生徒は何のことか理解できない。様々な練習方法を用意し、その練習をこなすことで、自然と思考力・判断力が高められていくような練習プログラムを教師は提供していかなければならない。

サッカーを得意とする生徒、そうでない生徒がいる。また、運動が得意な生徒、そうでない生徒がいる。どのレベルの生徒にも適度な難易度で、楽しみながら力を身に付けさせるように練習方法を工夫した。

4 指導の実際

(1) 生徒の実態（男子14人、女子7人、計23人）

2年生の単独クラスで授業を行った。生徒は明るく活発で運動することへの抵抗感はない。男子は精神的に幼い面があり、自分のしたいことや楽しいことには積極的だが、自分に必要ない、面白くないと感じたことには興味を示さない。また、仲間をからかったり、相手のことを考えない言動が見られたりする。女子は協調性があり、互いに気を遣わずに元気に活動できる。誰とでも仲良く接することができ、声を掛け合う姿がよく見られる。1年時はサッカーの授業がなかったため、基本的な技能はまだ身に付いていない状況にある。

(2) 単元全体の計画（全8時間）

次	時	ねらい (○) 学習内容 (・)	支援と留意点
第一次	1	○サッカーのゲームの仕方やルールを知る。 ・サッカーのルール学習を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・今もっている技能でボールに親しみ、ボールを足で扱うことに慣れさせる。 ・仲間とのかかわりあう練習を取り入れる。 ・ゲームのないチームには、ゲーム分析の仕方を徹底する。
	2	○ボール遊びでサッカーの楽しさを知る。 ・ドリブル鬼ごっこ ・ドリブルリレー	
	3	・フットテニス ・とりかご など	
	4	○試しのゲームでゲームを楽しむとともに、分析の仕方を知る。 ・チームで協力してゲームを楽しむ。 ・ゲーム分析の仕方を知る。 ・ゲーム分析 (1) をする。	
第二次	3	○ゲーム分析カードからチームや自分の課題を見つける。 ・学習カードにゲーム分析から分かることを記述する。	<ul style="list-style-type: none"> ・個でじっくり考える時間をとる。 ・モデル練習の必要性を生徒によく説明し、チームで効率的に練習が行えるように配慮する。 ・生徒の実態に応じて、ボールの種類を変更する。 (新聞紙や空気のないボールなど)
	4	○モデル練習を行う。 ・教師側が示したモデル練習を行う。	
	5	○モデル練習から、自分たちに合った練習方法を選び、練習方法を工夫する。	

	6	<ul style="list-style-type: none"> ・自チームにあった練習方法を選ぶ。 ○練習を生かしたゲームを行う。 ・練習を生かしたゲームを行う。 ・ゲーム分析（2）をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル練習をもとにした練習方法をいくつか紹介し、自分たちに必要な練習方法を選べるようにする。
第三次	7 8	<ul style="list-style-type: none"> ○リーグ戦を行う。 ・チームで反省会をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームの作戦を意識したゲームを展開できるようにする。 ・チームで協力してゲームが進行できる。

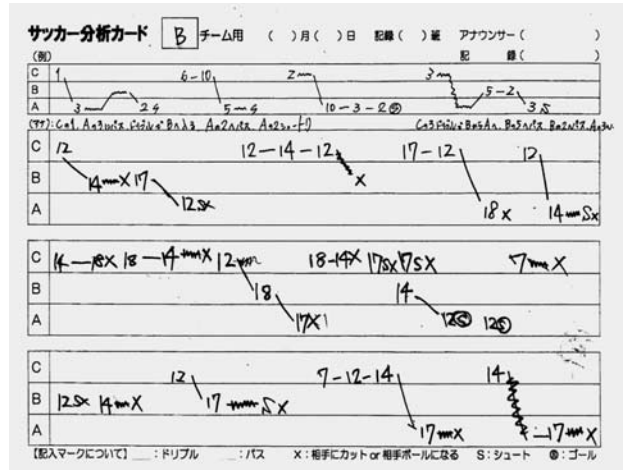
(3) 研究内容

① ゲーム分析による課題の明確化と話し合い活動による思考の共有化

右の図のようにコートをもとにA空間（相手ゴール前）、B空間（サイド）、C空間（自陣）と分け、ボールがどこへ移動し、どのように攻め込んでいるのかを分析カードに記録した。また、どのエリアで誰が何をしようとしたかも、分析カードに記録させた。

Aチーム対Bチームの分析は、ゲームをしていないCチームが二手に別れ、AとBのゲーム分析を行うこととした。

右図は学習カードに実際に生徒が記録した分析結果である。この結果から生徒は「12番14番17番はすごく動いているけど、他の人はあんまりボールに触れていない。」「パス回数は多いけどそんなに回っていない。」「Bエリアを使えていない。」「Cエリアばかりでパスがつながり、Aエリアではパスがよくカットされている。」などの意見があがった。



【図1 ゲーム前半でのBチームのゲーム分析シート】

自己の現状を知ることで課題が生まれ、その課題をどのように解決するのか考えることで生徒の思考力は高まっていく。今のゲームがどのような状態であるかを生徒自身が客観的に見られるような分析シートを用いる必要がある。今回は「使用頻度の多いエリア（スペースがない）を知り、使用頻度が少ないエリア（スペースがある）を使って攻める」という思考と、「ボールのつながり具合を知り、練習の必要性を感じ、練習方法を選択できる」という思考を高めるために、この分析シートを用いた。どの生徒もこの2点について分析シートから読み取り、エリアの使い方、パスの重要性について理解を深めていた。

次にゲーム分析の結果から出たチームの課題を持ち寄り、チームでの話し合い活動を行った。分析シートをもとに、まずそれぞれのチームで個々が考える課題を発表した。以下は、その際の生徒間のやり取りである。

【生徒間のやり取り】

- S1：「同じ人がずっとボールを持ってそのままシュートしてるパターンが多いから、もっと他の人を使ったほうがいいよね。」
- S2：「みんなの動きが少ないから良いパスがつながってないよね。」
- S3：「でもどこに動いていいのかわからない。」
- S1：「サイド（Bエリア）が使っていないから、〇〇さんはBエリアに動いてボール受ければパスつながるんじゃないかな。」
- S3：「そっかあ。じゃあ次のゲームでやってみるね。」
- 司会：「他に気づいたことないですか。」
- S4：「パスしても次の人がミスしているから、なかなかパスが繋がらないよね。」
- S1：「同じエリアで直線的なパスが多いから繋がらないのかな。やっぱりもっとサイドで受けられるようにして、DFのいないところを意識して攻めようよ。」
- S2：「じゃあ、必要なチーム練習は、まずボールをしっかり止める練習と確実にパスできる練習が必要だね。」

このチームは、サッカー経験者が一人いるが、周りがうまく動けずに孤立してしまうゲーム状態であった。パスした

くてもパスの受け手がなく、仕方なく一人でシュートまで持っていく形が多く見られていた。しかし、ゲーム後の感想には「シュートも入れたし、試合に勝ったので楽しかった。次の試合も勝ちたい。」という感想にとどまり、自分のプレーや仲間との連携に関しては一切触れられていなかった。また、同じチームの生徒も「自分から積極的にプレーする。」「〇〇さんに任せ過ぎたので次は頑張りたい。」という具体性に欠ける振り返りであった。

この分析結果からチームで話し合ったことにより、このチームは課題を意識してゲームに取り組めるようになった。全員が自チームの今の状況はワンマン型ゲームと認識しており、その解決に向けてエリアを意識し、サイドを使うように工夫していた。

ゲーム後の感想は「もう少し視野を広くして、サイドを使って攻撃したい。」「まだ、適当に前にパスを送っているだけなので、スペースを見つけてパスしたい。」「あいているところに動いてパスをもらおうと思ったけど、ボールを止められなかった。」「同じエリアにばかりいたから、もっと別のところに動いたほうが良かった。」など、以前より具体的な記述に変容していた。

② 思考力・判断力を高められるような練習方法の工夫 ア) 手つなぎラインゲーム

ねらい : ①サッカーに親しむ。
②あいているスペースを見つけてシュートできる。
練習場所: 体育館
人数: 7対7程度
練習道具: 新聞紙で丸めたボールを使用する。
(転がらずに扱いやすいため)
ゴール : 壁もしくは、コーンの間とする。



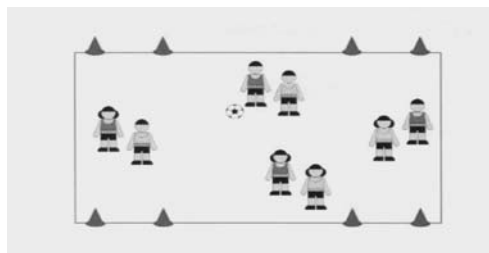
【写真1 ラインサッカーを楽しむ様子】

ゴールに手をつないで全員で守り、教師側が人数をコールしながら、ボールをコート中央へ投げ入れる。その数の生徒が手を離してプレーに参加し、その他の生徒は手をつないでゴールを守るようにする。ゴールが決まるか、一定時間を経過するかで次のプレーに移る。回転を早めることで、生徒は意欲的に活動していた。

ボールを新聞紙にしたことで、ボールが転がりにくくすぐにボールにプレーできるということもあり、特に女子の動きが活発であった。体育館の壁がゴールなので、手をつないでいるキーパーはボールの移動にあわせて左右に動かさなければならない。次第にプレーしている生徒は、ゴールキーパーをできるだけ左右に動かし、大きく開いているゴールの方を攻めようとする姿が見られた。

イ) ゴール2つゲーム

ねらい : ①あいているゴールを見つけて攻めることができる。
②全員で攻め、全員で守る意識を身に付ける。
練習場所: グラウンド
人数: 4対4程度
練習道具: サッカーボールを使用する。
ゴール : コーンの間の2つのゴールを使用する。



【図2 ゴール2つゲームの形態】

キーパーはつけずに、2つのゴールを用意する。どちらのゴールにシュートしても得点と認める。しかし、仲間がシュートしたとき、そのチームの全員がハーフウェイラインよりも相手コートにいないと得点と認めないというルールで行った。

最初はボールに群がり、だんご型ゲームが続いたが、次第に生徒から「〇〇さんは向こうのゴールの方に立って。パスするから」「戻しのパスをしたら逆サイドを攻めよう」などという声も聞こえてきた。男子は比較的すぐにゴールを2つにした目的を理解し、仲間の配置やパス展開を考えながらゲームを進めることができた。女子はすぐに対応できずにいたので、作戦タイムをとり、両チームに「周りを見て空いているところから攻めること」と「鳥かごの練習のときのように、ボールを受けられるようにボールから離れて動く」ことをアドバイスした。また、ボールを新聞紙に変え、再度ゲームを行った。すると、ボールのコントロールが容易になり、女子の生徒も次第にあいているスペースを探す余裕が生まれ、空いているゴールを攻められるようになっていった。

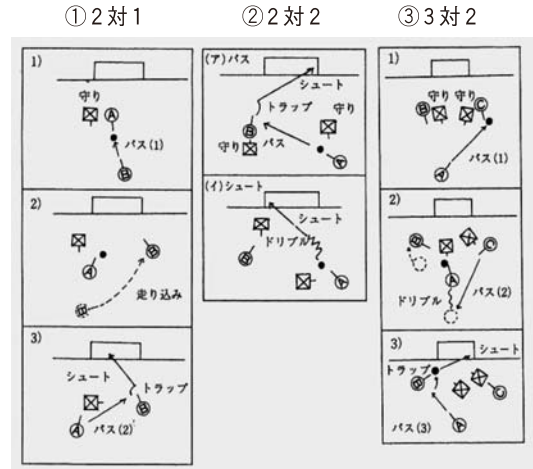
また、「シュート時に全員がハーフウェイラインより相手コートにいない」というルールの工夫により、

全員の運動量確保と、仲間のプレーとボールの位置で自分がどう動かなければならないかを考えさせるのに効果的であった。

授業後の学習カードにも「最初は固まっていたボールをただ蹴るだけだったけど、後半は周りを見てキックできるようになった。」「みんなと協力している感じがあって楽しかった。」という感想があった。

ウ) モデル練習

ねらい : ①あいているスペースに走り込み、数的優位な状況を作る。
 ②ボールを持っていないときの動きを意識する。
 練習場所: 体育館
 人数: 2対1～3対2程度
 練習段階: ①2対1 (DFカット無) → (DFカット有)
 → 2対1 バックパス有でバックパスの人も攻めて可
 ②2対2 (DFカット無) → (DFカット有)
 ③3対2 バックパスの人攻め不可→バックパスの人攻めて可
 練習道具: サッカーボールを使用する。
 ゴール : コーンの間をゴールとする。キーパーはなし。



【図3 練習段階】

段階的に人数を増やしたり、守り方を制限したりする中で、オフェンスは決められた動きで数的優位な状況を作り出す練習を行った。ボールコントロールがまだ未熟な段階でカット有の練習だとパスが繋がらず、シュートまで持ち込むことができない。そこで、カット無のマークだけにDFを制限することで、OFが練習しやすい環境を作り出した。しかし、決められた動きばかりの練習では物足りなさを感じている生徒もおり、練習へ取り組む姿勢に真剣さがなくなってきた。

そこで、モデル練習を生かせるようなミニゲームを行った。2チームに分かれ、攻めるチームは3分間攻め続け、守るチームは3分間守り続け、制限時間内の得点合計を競うように工夫した。ゲーム性を取り入れたことで、生徒の意欲は高まるとともに、モデル練習で行ったことをそのまま生かそうとする動きも見られた。自分がどこへ動いたらいいのか、どうしたらボールがつながるようになるのかゲームの中で話し合い、チームで動きの確認をする様子が見られるようになってきた。

5 実践の考察

(1) ゲーム分析による課題の明確化と話し合いによる思考の共有化 (研究内容1)

ゲーム分析から全員の生徒が学習カードに自分たちの今のゲームの状態を知りゲームの型を選び、その理由を記述することができた。このことから細かなゲーム分析を行い、生徒に提示することで、ゲームの現状について知ることができたといえる。

次に、パスのつながりについては22名が、エリアについては4名の生徒が課題発見することができた。以下はその記述である。

パスのつながりについての具体的な記述	エリアについての記述
<ul style="list-style-type: none"> ・パスの回数は多いけど、そんなに回っていない。 ・同じ人がボールを持っている。 ・11番がボールを持っていて、パスしても続かない。 ・同じ人同士でしかパスが回っていない。 ・よくカットされている。パスがまわらない。 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・サイドをあまり使ってなく同じCエリアでパスが多い。 ・Aエリアばかりの攻めが目立ち、Bエリアを使っていない。 ・Cエリアばかり使っていて攻めあがっていない。 ・CエリアからAエリアのパスはほとんど成功していない。

課題発見は生徒の思考力・判断力を高めるために最も必要なことであると考えられる。この課題を自らが見つけることで、次への思考が開かれる。学習カードの記述の様子から生徒の思考力は高まったと言える。

サッカーはチームスポーツである。個々で考えた課題を共有しなければ、パスはつながらないし、良い攻撃もできない。ゲーム分析結果を伝え合い、チームで次のゲームで意識するポイントやチームに必要な練習を話し合わせたことで、各チームの課題が明確になり、チーム全員が課題を意識した練習やゲームを展開しようとしていた。また、チーム力向上のために、自分が考えたことを仲間に伝えようとする姿が多くみられるようになってきた。それぞれの思考をチーム

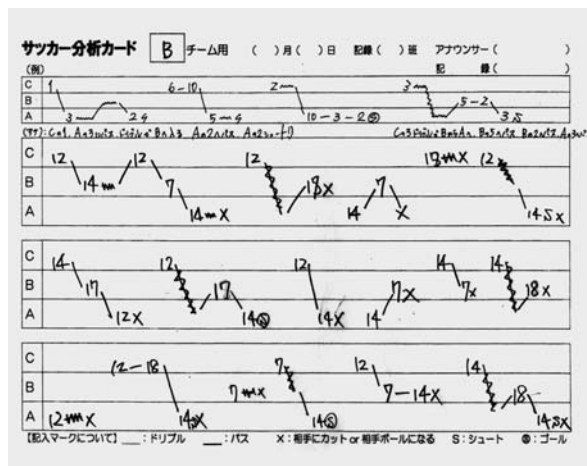
で共有化し、チームで一つの課題を見つけ出すことが、後の練習や作戦立ての際に有効となったと考える。

(2) 思考力・判断力を高められるような練習方法の工夫

思考力や判断力は、技能の中にも当然現れてくるものであり、それらは教師が的確に見取っていかなければならない。練習方法を工夫したことにより、生徒はより良く攻めるための方策を考え、行動に移していた。

右図は授業後半のゲーム分析の結果である。このチームの課題は以下の3つであった。

- ① Bエリアを有効に使い、サイド攻撃ができるようにする。
- ② 全員がボールに触れるように、人の配置を考える。特にBエリアに広がるようにする。
- ③ パスがつながるように、しっかりトラップし、インサイドキックでパスする。



【図4 授業後半でのBチームのゲーム分析シート】

授業前半の結果と比べると、確実にBエリアを使おうとする意識がでてきたのが分かる。サイドに仲間を配置するという作戦がいきている。特定の人しかボールに触れないゲーム形態から、チーム全員がボールに触れるようになってきた。これは、今までボールのないところでの動きが分からず、孤立していた仲間がモデル練習や作戦を意識した動きが現れた結果である。

パスのつながりに関しては、技能面の問題もあり、残念ながら顕著な向上は見られなかったが、ボールをまずしっかり止めようとする姿や、周りを見てパスを出そうとする姿が、授業前半のゲームより確実に増えたのは明らかである。

ボールを本来のサッカーボールにこだわらずに、新聞紙を丸めたものや空気の抜けたボールを使用したことによってボールの扱いが容易になり、生徒はボールコントロールよりも動きやスペースに意識が向くようになったのも効果の一つであると考えている。

5 成果と課題

(1) 分析シートの活用について

分析シートの活用により、チームの課題が明確になった。また、話し合いによる思考の共有化により、その後の練習方法の選択やチームの作戦立ての際に有効となった。これらを通して生徒一人一人がサッカーに対する思考力・判断力を高めたといえる。また、思考力・判断力を高めると同時に生徒の意欲も高まり、自ら練習を考えてゲームに取り組もうとする姿へ変容していった。

課題は分析シートの簡略化である。分析はアナウンス役と記録役の2人で行ったが、1回の説明で理解し、自分たちで進めるには非常に苦労があった。何度も練習を兼ねてゲームを行い、教師はゲームを見るより、分析の仕方の指導に追われていたのが現状であった。分析シートから生徒に読み取らせたいという項目を欲張りすぎた結果であると考え。1つのシートに1から2項目程度が現れるようにし、それをいくつか用意することでこの課題を解決したい。

(2) 思考力・判断力の評価について

思考力・判断力を高められるような練習の工夫により、個々の技能も同時に高めることに繋がった。思考力・判断力は技能と密接に関わっているものである。従って、思考の高まりはそのまま技能にも現れてくる。しかし、技能がなかなか身に付いてこない生徒の思考力・判断力の評価に困難があった。自分なりの考えがあり、蹴りたい場所やドリブルしたい方向はあるのに技術がないためにそれができない生徒の思考力・判断力を正しく評価するためにはどうすればいいのだろうか。正しく思考力・判断力を評価するにはまず、基礎基本となる技能を身に付けておく必要がある。思考力・判断力とは学習カードの文章表現だけでなく、技能にも現れてくるものであり切り離しては考えられないからこそ、評価も難しいと感じた。生徒一人一人の思考力・判断力を正しく評価する方法について、今後も研究を重ねていきたい。

6 引用・参考文献

文部科学省 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 平成20年9月
 岡田和雄 鈴木 聡 編「新 絵で見るサッカー指導のポイント」日本標準 2010
 財団法人 日本サッカー協会「JFA キッズドリル」2005